

気軽に楽しく詩の授業を

河内長野市高向小 杉山 和正

■三年目の子どもたちです

今年は、四年一組の担任、二年生から連続三年目となります。二十名という恵まれた環境のなかで、連続三年受け持つ人も九人います。三年目ともなると、子どもたちの成長の様子がよくわかって、よくぞここまで分別がついてきた、と感心することもしばしばです。もちろん、けんかやめいこともありますが、いそいそと登校する日々です。

■身近なところに詩のある生活を

文学でも、詩でも、作文でも、子どもたちの身近なところにそれらのものがあることが大切です。

教科書でとりあげられる詩は、年間せいぜい二〜三編です。

子どもたちには、いろいろなジャンルの詩と出会ってほしいと思います。ほくの場合は、次のようなことをしています。

①背面黒板に詩を書いて、朝の会で読み合う。(二週間に一度くらいで新しいものとする)

②家庭学習での本読みカードに、ときどき詩を紹介する。

③月に二回程度詩を鑑賞する授業をおこなう。

このうち、①の背面黒板に紹介するものは、主に音読の楽しさを感じてもらえるものを選んでいきます。

四月からとりあげた作品は、「はやくちうた」(川崎 洋)

「早口ことばのうた」(藤田 圭雄)「お経」(阪田 寛夫)

「心に太陽を持って」(フライシユレン)「あめ」(山田 今次)

「かぼちゃのつるが」(原田 直友)などです。このなかでは、

「お経」がとくに人気がありました。「電車 馬車 自動車」を「でんじゃあ ばあじゃあ じどうじゃあ」というように、

低い声でまるでお経のように読むのが楽しかったようで、自分でどこからかお経を調べてきて、黒板に書いたり、読んだりする姿がしばしば続くほろよいでした。

家庭でも音読をしてほしいとの願いから、音読カードを続けてきましたが、教科書から作品が減って、音読させるもの

が、ぐんと減りました。それを補う意味で、ときどき詩を紹介して、それを読んでもらっています。二年生から続けているので、ずいぶんたくさんの作家やジャンルを紹介してきたことになりました。谷川さん、まどきさん、工藤さん、などはすっかり「友だち」です。

■詩の鑑賞指導で大切にしていること

国語の授業時数も少なくなり、教科書の内容も変えられ、子どもたちが、読み物や詩、作文をとおして「言葉の力」(斎藤孝先生の著作から引用)を実感できる機会がずいぶん減らされています。そんなときだからこそ、質のよい作品を子どもたちに届けることに腐心したいと思っております。数多くとはいかなくても、学期に四〜五編、一年間では十編程度は、子どもたちとゆっくり詩を味わう時間をとりたいものです。一時間の授業で大切にしたいことは、次のような点です。

- ①ゆっくりかえし音読する。(指黙読、指斉読、指名読み)
- ②作品をゆっくり書き写す。(教師は黒板、子どもはノートまたはプリント)

③作品からイメージすること、感じることを語る。そのため

の手助けになる発問を準備しておく。

作品によって違うので一概には言えないでしょうが、説明が少ないだけに、イメージの世界を楽しめるのが詩のもつ魅力の一つです。また、作者が何を見て、それをどう感じたのか、さらにその作者の感じ方を読み手はどう思うかを交流するのも、鑑賞の楽しさです。

イメージの世界を広げること、もっとも有効なのが、音読と視写だと考えます。この二つを大切にすることは、日本語の

豊かき、美しさ、おもしろさに気づくことにもつながるでしょう。

ただ、言葉が凝縮されているだけに、作品の世界がわかりにくい、届きにくい場合もあります。そこで、作品の世界に入るための、またイメージを広げる手助けの発問が必要になってきます。その発問を考える際、教師がどれだけ豊かに作品を読んでいるか、教材研究をしているかが問われるのですが、ここがなかなか難しく、うまくいっていません。

一時間の展開は、およそ次のとおりです。

- 一、作品を視写する（教師は黒板、子どもはノート）
- 二、目で読む。一斉に読む。指名して読む
- 三、感想を語る
- 四、読む。（数人）
- 五、イメージを広げる。「作者は何を見ていますか」「それをどう思っていますか」「どんなものが出てきましたか」など作品に則して。※作品によって、三と五の順番を入れかえる。
- 六、読む（数人）
- 七、さらに感想があれば語る
- 八、読む（一斉読み。時間があれば、暗誦）

■一学期の実践から

草野心平 蛙の詩を読む

★春の歌

ほっ まぎしいな。

ほっ うれしいな。

みずは つるつる。

かぜは そよそよ。

ケルルン クック。

ああいいにおいだ。

ケルルン クック。

ほっ いぬのふぐりがさくらている。

ほっ おおきなくもがくくくくる。

ケルルン クック。

ケルルン クック。

教科書では五月教材になっていましたが、四月、子どもたちが張り切っている教室のなかで、せいっぱいの声で読ませたいと、今年の国語教室を「春のうた」からスタートしました。

授業としては一時間をとって、視写をし、繰り返し音読しました。そして、暗誦をよびかけ、暗誦できた人から数人ずつ発表してもらいました。どの「蛙」も、元気よく春の喜び

を表現してくれました。

何回目かのとき、一番前の席のこうじくんが、「なんかへんやなあ」といびきをかくので、「ふんがっ」とたずねると、「みずはひるひるっておかしら。あつう、そんな言い方せえへん」と言います。そこで、「ひるひるって、どんな感じがする」と言いつつ、「凍ってるんよちがう？」と考えていた人がいたので、びっくり。詩の場合、ときとして、とんでもないイメージを持って読んでいる子がいるものだからういことを、あらためて感じさせられました。

春の季節を確認すると、水が凍っているとどうのはおかしいというようになったので、そのあと「もし、ひるひる、ではなくて、ぬるぬる、とになっていたらどうかな？」とたずねました。めぐみさんが、「ぬるぬるって、汚れている感じで、つるつるだったら、とてもきれいな水のように思う」と言ってくれたので、こうじくんも納得したようでした。

★いぼ

いぼがえるだよ。
いぼがえるだよ。
いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

いぼがえるだよ。

せっかく、草野心平さんとのお会いがあったので、蛙の詩を季節ごとで読むプランをたてました。五月になってとりあげたのが、「さび」です。もちろん、「春のうた」Aと同じく、春をむかえた喜びを、蛙の「さび」で表現している詩です。

学習目標 (願)

- ① 春をむかえたいいほがえるのはずも思い、喜びの表現を読む。
- ② いほがえるは、目、耳、鼻のすべてをひかかって、春を感じている。その世界を味わってはいる。
- ③ 「春のうた」同様、楽しく音読する。

一時間の展開

- ① 読む (黙読、斉読、席順読み)
- ② 語る
 - ・ だれがだれに話していますか。
 - ・ いほがえるは、何年生までいるAですか。
 - ・ いほがえるが、「はるくん」に親しみを感しているのは、どんな言葉からわかりますか。

③ 読む (席順読み)

- ④ 語る
 - ・ いほがえるはどんなものを見ましたか。(どんな音を聞きましたか。どんなにおうをからいますか)
- ⑤ 書く
 - ・ 「におうがきんきんするな」「そらでまひらひらもひらひらなんか鳴き出したな」を視写し、におうや音で想像したことを書く。

⑥ 読む

⑦ 語る ⑤で書いたAを語る

⑧ 読む

授業記録 (ユシツクは、教師の言葉)

- ・ 作品を拡大コピーして黒板に貼り出す。
- ・ 何人が声に出して読んでいる子がいる。
- ・ 声に出さないで、読んでみましよう。
- ・ 一度先生の読むのを聞いてください。(教師の読み)
- ・ 一緒に声に出して読みましよう。(二回二斉に読む)
- ・ 三人ずつ、一連と、読んでもらいましよう。
- ・ 三人が読む
- ・ 誰が誰に話しかけているのでしよう。
- ・ いほがえるが、春くんだ。

・ 鳴き声も聞いている

・ では、句の「ウグイス」鳴き声の「ウグイス」だけ、書き写してみましよう。

・ 「句いがきんきんするな」「そっちはもうっちはもうっちは」なんか鳴き出したな」を視写する。

・ 読んだあと、「どんな句いをかいたのか、どんな鳴き声を聞いたのか、自由に想像してください。」

・ 三人が読む

・ 想像した「とき」ノートに書きましよう。

・ 書く

・ 句いは？

・ 春の句い(らっしよや)

・ 自然の句い

・ 花の句い

・ 植物の句い

・ 水の句い

・ いぼくんは、その句いがきんきんするって言っています。

・ 句いがらっばらあるって感じがする。

・ 冬の句いも少し残っている。雪解けの水の句い。

・ 「きんきんする」「ウグイス」冬眠していて、久しぶりに

土の上に出てきたから、きんきんするって書いてあるの

かな。

・ 土の句い

・ では、鳴き声は？

・ 仲間の鳴き声(言われてしまった)

・ 生き物(鳥とかウグイスとか…)

・ 水の音とか草の音とか、雪解けの音も入るかもしれない

・ こんなものも想像した人もいるのですか？

・ 春風に動かされた葉っぱの音なども聞かえてきたのかも

れない。

・ おひびくってらうのは、春くんがいぼくんを待っているの

に、まだけえへんのかなって言っているんじゃないかと

思った。春くんが言っている。

・ 三人が読む

・ 一斉に読む

授業を終えて

授業が終わった後に、ひろきくんが、「ぼくがぐるぐる見

ま

わしているせいではないだろう、と書いているのに、雲も太陽も見えたというのが疑問。」と話しかけてきました。そこで、『びっくりしなくってもらいよ、って誰が誰に言っていると思っ？』とたずねると、『突然出てきたかえるくんが春くんが、びっくりしなくってもらいよ。』と言っている。』と言います。ぼくは、いぼがえるが自分で自分に言い聞かせている言葉だと思っていたので、これには驚きました。でも、そんな読み方もまったくまとはずれでもなく、むしろかわいい読み方だと思います。

授業のなかで、「あつあつなんか鳴き出したな」を、蛙ではなく、イモリの足音だと想像したり、春の息吹の音だと想像したり…草野さんの真意とは違うのかもかもしれませんが、自由に想像する楽しさを味わってくれたようです。

ひろきくんだけでなく、今度はみかちゃんまで来て、「やりきれんなくてどんな意味やる」とたずねてきました。この「やりきれんな」という表現は、「うれしくてたまらない」気持ちの、裏返し表現でしょう。草野さんは、ひよっとするど、わびど」やりきれんな」という逆説のような言葉をつかって、みかちゃんにかえるの喜びを強調しようと言われたのかもしれない。この表現は四年生の子どもたちには少し手におえな

いと思って、授業ではとりあつかわなかったのですが、いずれにせよ、授業が終わった後に、その作品についてみかちゃん語ろうとしてくれる光景をつれてく思いました。続いて、六月になり、学校のまわりの田んぼも田植えが終わったころ、次の蛙の詩「号外」をとりあげることになりました。

★号外

界限でいちばん凜猛な縞蛇が殺された

田から田へ号外がつたわって

みんなの背中はよろこびに盛り上った

ぎやわろッ ぎやわろッ ぎやわろろろろりッ
ぎやわろッ ぎやわろッ ぎやわろろろろりッ
ぎやわろッ ぎやわろッ ぎやわろろろろりッ

ぬか雨の苗代に

蟻がふるそでいる

- ・蛙が出てくる
- ・蛙ってなんでわかった？
- ・ぎゃわろッというところで
- ・鳴き声で判断している
- ・蛙も付け足した方がいい
- ・このなか（縞蛇と蛾とみんな）で蛙はどねですか？
- ・みんな
- ・みんなが、蛙や…だから喜んだやー！
- ・ああ？そうか、みんなっていろいろのは蛙か……
- ・めぐみさん、読む
- ・感じたこと、思ったことと自由に言ってくたさい。
- ・最初、ぎゃわろッ が分からなかったけど、こうじくんが蛙の鳴き声だと言ったので、蛙とわかった。
- ・なぞがとけた、こうじくんのおかげ。
- ・この号外だというのは、人間の号外ではなくて、蛙の号外だということがわかりました。
- ・縞蛇は誰に殺されたのかなと思いました。
- ・書いてないけど、予想した人は？
- ・人間かな？蛙じゃないことは確か、
- ・蛙は縞蛇から殺される存在であって、逆のようはないよね。

- 「この縞蛇は誰かによって殺された。
 - 人間じゃなくて、たとえばいたちに殺されたと思う。」
 - こうじくん 読む
 - 蛙は蛾を食べられるけど、縞蛇がおったから食べられなかった。
 - 蛙が助かったおかげで、今度は、蛾が蛙から食べられる、皮肉やね
 - 蛾って一匹かなと思った。
 - 書いてないけど、みんなは一匹だと思いましたか。それともたくさんだと思いましたか。（とぎちゃも手が挙がる）
 - 縞蛇はかわいそうだと思ったけど、なんで蛙が喜ぶのかなと思っていただけ、縞蛇にねらわれているからだということがよくわかりました。
 - 一斉読み
- 読み方も含めて、四年生の子どもにとっては、かなり難しい内容を含んでいる詩だと思っていました。生命を脅かされているものが、相手の死によって、その恐怖から解放放たれる喜び。一方、その喜びのかけで、今度は生命を脅かされる存在があらたに浮かび上がる。自然界の

厳しさ、皮肉な運命。「ぎゃわろッ」の繰り返し、蛙の喜びを表現している。一連のぎゃわろッと二連のぎゃわろッは、同じか、それとも少し違っているのか…などなど、みんなで考えればいろいろな思いがふくらんでくる詩です。けれど、相手は四年生。どこまでそれが届くだろうか。

視写するとき、あえて漢字を使ったのは、原文のイメージを損ないたくないという思いと、読み方や意味を考えるなかで、作品の世界に近づけていければとの思いからでした。

しかし、これは、かなり抵抗感がありました。ひろきくんなど、意味がよくわからないというイライラ感を露骨に表していました。ぎゃわろッって何という子どもの質問が早くから出ていて、それを先に明かにしていれば、また、「みんな」というのは、蛙のことだということも、初めの段階で明らかにしていればよかったのかもしれない。

けれど、前半、意味がわからずに時間が推移していっただけに、「蛙」と「みんな」が同じだということがわかったときは、「目からうろこ」「という感じで、子どもたちの表情がぱっと明るくなり、感動の声があがるほどでした。

結果的には、作品の世界の輪郭がなんとなくわかるという

ところで終わってしまったって、そこからどう読んだかということまでつながらなかったのですが、子どもたちなりに、よくがんばって考えてくれたと思います。

この授業は、教育実習生のNさんに参観していただいたのですが、次のような感想を寄せてくださいました。

四十五分間驚きの連続でした。新しい詩を読むとき、プリントを刷って渡してしまいそうなものを、子どもたちが自分で書くことで、自然に詩の世界に入っていた、それぞれがいろんな感想を述べていました。：(中略)先生が児童と同じペースで書く、児童が途中で息つくことなく集中して書けるということを感じ、納得できました。

時間中、何回も詩を読んではいましたが、子どもたちの読み方は、本当にじょうずでした。一回一回読むたびに、新たな疑問が出てきて、一つずつ説明していく様子が見られ、子どもたちも初めは難しく変だと言っていた詩に、だんだんと興味をもって、身を乗り出すように黒板を見ていました。

国語の授業では、物語や詩の世界にどれくらい入ってこられるかという導入の部分がすごく大事だと思います。私も教材研究をしっかりと、研究授業に臨みたいと思います。

二学期には、「秋の夜の会話」と「冬眠」を読み合ってもらっても冬眠は、●だけですか、読みたいはどきどきなのですか、草野心平さんの蛙の世界を味わってみたいのです。

★秋の夜の会話

さむいね。
ああさむいね。
虫がいないてるね。
ああ虫がいないてるね。
もうすぐ土の中だね。
土の中はいやだね。
やせたね。
君もずいぶんやせたね。
どこがこんなに切ないんだろうね。
腹だろうかね。
腹とったら死ぬだろうね。
死にたかあないね。
さむいね。

ああ虫がいないてるね。

★冬眠

参考資料

次に紹介する授業プランは、四月最初の学習参観のときのもので、音をならす小道具も用意して、楽しく学習ができました。とまは、このような言葉あそび的な詩もおもしろいと思います。時間があれば、創作してもらいたいかながる詩です。

音 まど みちお

ピアノの音 ぽろん

サクランボ ひとつ

たいこの音 どどん

大波 ひとつ

・(どどん、と書いて) この音がらどんなものを想像しますか？

・(大波 ひびく、と書いて) 海の波に聞こえました。

・(カスタネット、と書いて) まあ、これは難しいから、ちょっと先生が鳴らしてみます。(カスタネットを「ケケ」と鳴らして) どんななななな聞こえましたか。

・(ひび、と書いて) あ、ハルが想像したものはむしろかしく。ヒントは「のあと」ひびきわって書いてあるのです。

これは食べ物と想像してらるのですが、どんな食べ物一切をだすことができますか？

・(おっしゅん、と書いて) おっしゅんって何かわかりますか？

・(おっしゅんの音、と書いて) あ、これは？

・(おっしゅん、と書いて) これも食べ物と想像してらるけど、当てるのは無理でしょう。

・(あんぱん ひびく、と書いて) どうして？おっしゅんがあんぱんなの？

・(トライアングル、と書いて) これも鳴らしてみるから、聞かせてください。

・(しゅん、と書いて) 「ちゅん」ではなく、「しゅん」と感じるのがまじか？

・これは、あるもの一本と感じました。なんでしょう。

・(かみの毛 一本、と書く)

・(すずの音、と書いて) (ティンカーベルをならして) あ、この音は？

・(ちりん、と書いて) これはマメの花と想像しました(と言いつつ、マメの花 ひびく、と書く)

・(もくぎの音、と書いて) 木魚ってわかりますか？これはどんなななな聞こえましたか？

・(ほいん、と書いて) ほいんって出るものは？

・(たのび、と書いて) ひびく、と書く)

・次をお願いします。これは音ではありません。

・(うさぎ、うた たちりー にじの橋 ひびく、と書く)

●書けた人は、黒板と見比べて、まちがいがいか確かめましょう。黒板の文字を、一度目だけで読んでみましょう。

●では、声に出して読みましょう。先生も読みますから、遅れないで読んでください。

●次は、先生は小さい声しか出しませんから、みなさんの方はしっかり声を出してください。

●となりの人と交代で一行ずつ読みましょう。題はみんなで

読みます。

●最初に読む方を交代します。

●一人ずつ読みましょう。一連を読んだら、次の人が読みます。今度も題と作者はみんな読んで読みましょう。

●音のところだけ読みたい人いますか？

●いろんな音の読み方があって、楽しいね。では、音のところだけ、消してしまいます。読めますか？

●次は、連想したものも消してしまいます。大丈夫かな？

■時間がある場合

・自分でも、うそっこうたを考えてみてください。(何人かの分を板書してみんな読んでよい)